

2023年5月29日

武蔵野美術大学 学長 殿

海外研修報告書

下記の通り、海外研修の報告をいたします。

記

氏名	椋本真理子	所属	彫刻学科研究室
		職位	助教

研究課題	中東のアートシーンと巨大建造物の調査
研究先機関	UAE：ブルジュ・ハリファ、ルーヴル・アブダビ、シェイク・ザイド・モスク エジプト：アブ・シンベル神殿、アスワンハイダム、王家の谷、ルクソール 神殿、ルクソール博物館、カルナック神殿、ピラミッド、エジプト考古学博物館
主な滞在地 (国・都市名)	UAE：ドバイ・アブダビ エジプト：アスワン、ルクソール、カイロ
渡航日程	2023年3月26日 ～ 2023年4月10日（ 16 日間）
研究目的・理由	2017年にはルーヴル別館がアブダビに建設されるなど経済成長に加えアートの面でも発展を続けるドバイ・アブダビでの現在のアートシーンの調査。また、過剰な現代建築や世界最大の人工島を調査することで自身の制作研究テーマである巨大人工物について掘り下げる。現在の巨大人工物と対比しエジプトを加え、古代の巨大人工物も同時に調査した。
研究成果発表予定 (展覧会、著書、論文発表等)	2023年5月 東京都内のギャラリー・カフェスペース『pottari』における個展で研究成果発表予定

研究内容

自身の作品の核となるモチーフに巨大人工物がある。作品を制作するきっかけとなり、制作を始めた2009年から現在に至るまで変わらず重要な要素である。日本の巨大人工物、例えばダムや防波堤、水門などは調査・研究のため足を運ぶが、海外の巨大人工物においては以前から興味があったものの調査の機会が取れなかった。今回は海外の巨大人工物や美術館を調査する。

当初、ドバイの巨大建造物メインに調査する予定だったが、現代このような人工建造物が誕生することとなった原点である古代エジプトを加え現代と古代の巨大人工物と歴史を調査をすることにした。

【ドバイ・アブダビ】

ドバイは、7つの首長国から構成されるアラブ首長国連邦の一つである。油田の発見から原油高の後押しもあり近年急速に発展。日本でも著名人が移住するなどタックス・ヘイブンのエリアのため世界中の富裕層が集まる国として知られている。実際、居住している外国人の割合は90%にのぼる。今回の研究はこの急激な発展が目覚ましいドバイに次々と建設される巨大人工物だ。

・世界最高の超高層ビル/ブルジュ・ハリファ：2010年に完成した世界一の高層建造物。全高828m。限りある資源・原油への依存脱却を図り観光業やサービスの多様化を目的とし「世界一」を目指す国家プロジェクトの中で誕生した。世界中の技術を結集し建設期間はわずか6年。ブルジュ・ハリファは、取り囲む高層ビル群の中でも飛び抜けて巨大であり、その近未来的なデザインもあって存在感は圧倒的だ。外壁にはステンレスが使用され朝陽や夕陽を反射して煌めく様子はにわかに現実存在しているとは信じがたい。圧倒的存在感でそびえ立っているにも関わらず映像的というのか、現実味がないほど完璧な姿である。ブルジュ・ハリファの周辺も開発が進み、まるで未来都市のようにきらびやかである。中東の砂漠で、尚且つイスラム圏の国が発展していく際にSFのような近未来的デザインを取り入れながら発展していくのは非常に興味深い。この未来都市空間でありながら、飲酒や服装の制限、ラマダン(断食)といったイスラム教の戒律も共存している。(ちょうど訪れた時期がラマダンだったため、より実感できた)

・ルーヴル・アブダビ/ルーヴル美術館といえば、フランス・パリだが、UAEにも2017年に姉妹館として誕生した。文化施設による発展と観光誘致を目指していたUAE・アブダビとフランスが協働し国家プロジェクトとして進められた。プロジェクト発足当初は、フランス国内から自国の文化遺産を売り渡す行為と反対意見もあった。アブダビにとっては、UAEの首都であり原油の輸出を背景とした飛躍的発展を遂げたものの、観光として弱かった部分を「ルーヴル」というフランスのブランド力を借りたことは有効な戦略だった。美術館のコンセプトはユニバーサル。作品は、600点の所蔵作品に加えフランス側から貸し出されたおよそ300点の作品が展示されている。面白いのは、展示方法だ。いわゆる、美術館にみる整然とした陳列・展示ではなく、作品を魅せる空間になっていること。従来の展示でみるガラスケースの什器もなく、空間に合うようにデザインされた什器が使用され作品も国や地域関係なく年代ごとに同じ空間に展示されている。コンセプトがユニバーサルであるように、国境を超えた人類の文化・文明の歴史を生き生きとした作品展示から読み取ることができる。あまり見ない展示方法なので、ルールに縛られない非常に新鮮な空間だった。また、視覚障害の方でも観賞しやすいよう展示の解説板には、点字、アラビア文字、英語が併記され、展示物の模型が解説板に貼り付けてある。この模型を触ることで、素材や形が伝わるよう工夫もされており、分け隔てなく美術館を楽しめるようになっている。

・シェイク・ザイド・グランド・モスク/UAE最大のモスク。モスクの名前にもなっているUAE初代大統領シェイク・ザイド・ビン・スルタン・アル・ナヒヤーンが埋葬されている。異教徒でも見学ができる数少ないモスクだ。2007年に誕生したこのモスクは、イスラム文明の建築様式を取り入れ、純粋さと信心深さを表現する白を基調とし大理石で建設された。この豪華絢爛な作りは、アラブ建国の父・シェイク・ザイドの「多様性を受け入れる寛容な文化が国を発展させる」という考えから、国内外から3,000人以上の職人を招集し大理石、金、陶器などの高級素材を惜しみなく使用し誕生した。毎日祈りを捧げる神聖な場所であり、現実とはどこか切り離されたような空間であった。

【エジプト】

・アブシンベル神殿/アブシンベル神殿は、アスワン南部のナセル湖のほとりにある大岩窟神殿だ。神殿は、大神殿と小神殿とあり、二つの神殿は同時に見学することができる。この巨大神殿を建設したのは、古代エジプト進王国時代19王朝のラムセス2世。小神殿は王妃ネフェルタリのために建設された。大神殿の正面には高さ20mの巨大な4体のラムセス2世像が並んでいる。さらに神殿内部の大列柱室にもオシリス神の姿をした10mのラムセス2世の像が8体そびえ立ち、その自己顕示欲の強さを物語っている。この巨大な神殿、そしてこれだけの石像が今から約3300年前に作られたとは信じがたい。どんな道具があったにせよ、人力に頼っていたことは確かである。そして今もこうして、目の前に存在していることが奇跡である。この圧倒的な迫力と存在感、何よりこの巨大さがラムセス

研究内容

2世の絶大な権力を証明している。これだけのものが3300年前に建設されたことも信じがたいが、もう一つ信じがたいことにこの神殿は1960年代水没の危機に瀕し、水没から逃れるためなんと今の場所に移設されていたのだった。1960年代、アスワンハイダムの建設が始まったことで、水没の危機に直面。ユネスコの呼びかけにより世界60カ国が移設を支援。神殿は約1000個以上のブロックに切り分けられ、4年の歳月を経て現在の場所に移設された。これだけ巨大な神殿を建設する発想、その神殿を移設するという発想、3000年前も現在も、人間の発想には際限がなく、そして想像したことは現実に行けるということを目の当たりにして、人間の力に驚嘆した。これは、私が日々の制作でモチーフとしているダムの建設と近い驚きと感動があった。

- ・アスワンハイダム/ナイル川に造られた高さ111m、全長3,600mの巨大ロックフィルダム。アスワンの街から南方約12kmの地点にある。1970年に当時のエジプトのナセル大統領がソ連の支援を受けて完成した。あまりに巨大で且つロックフィル型なので、風景に溶け込んでいるが、全長500kmに及ぶ人造湖とナセル湖が続いている様子は圧巻。毎夏氾濫するナイル川をコントロールし、エジプト農業の生産向上に貢献した。アブシンベル神殿でも述べたように、建設時の遺跡や生態系への影響は多大であった。

- ・王家の谷/新王国時代に岩を削って造られた岩窟墓地群。一見、墓地がそこにあるとは思えない、壮大な岩と砂の風景が広がっている。これだけ険しい場所でさらに岩窟奥深く、そして60を超える墓を作らせたのは、当時の王家の権力が絶大だったことがわかる。3つ選んで墓を見学できるが、どの墓も壁画が保存されており、色彩やその細かな装飾が見事だった。石棺は巨大であり、また表面に施されたレリーフは緻密で素晴らしいものだった。墓の内部はもちろん、この岩場全体が早大で圧巻だった。

- ・ルクソール 神殿、カルナック神殿/ルクソール 神殿は、カルナック神殿の副神殿として建てられた。ルクソール神殿とカルナック神殿とは、スフィンクスが両脇に並ぶ参道によって結ばれていた。スフィンクスの参道は現在も見ることができ、両脇に整然と並ぶスフィンクスの列は迫力と神聖な道としての緊張感があった。ルクソール神殿は第一塔門前に建つ高さ25mの巨大な石塔「オベリスク」がシンボルのひとつ。天高く真っ直ぐにそびえ立つオベリスクは、ミニマルな形状でどこか宇宙を感じた。数千年前に造られたデザインと技術とは信じがたい。これだけ細長い形状で、現在まで残っているのは奇跡的である。カルナック神殿は、エジプトでも最大規模の神殿である。入り口には、スフィンクス像が両脇に鎮座している。よく見ると1点1点表情や形が違って、職人による手作業というのが伝わる。神殿の奥には、大列柱室があり巨大な柱がいくつもそびえ立っている。そのひとつ一つにレリーフが施されており、さらに当時は屋根もついていたというので驚いた。

- ・ピラミッド/ギザの三大ピラミッドは4500年前の建造物で、まだ未知の部分も多い。まずはその巨大さに圧倒される。一番巨大なクフ王のピラミッドは平均2.5tを石を約230万個積み上げられて建造された。想像を絶する労力がこのミニマルな形に収まっているのが面白い。ピラミッド内部は狭く蒸し暑い。石室までの道のりは険しく、腰をかがめて蒸し暑い中進むしかない。進んだ先にある石室は究極にシンプルな立方体の部屋で大きな石棺がひとつあるだけだ。巨大な石が積み上げられた構造の内部に入れる感覚は非常に奇妙だった。

- ・エジプト考古学博物館/館内の巨大さと収蔵品の量に圧倒される。巨大な展示物がひしめき合う空間で、当時の暮らしを感じる小さな展示物が非常に面白いものだった。当時、王族が遊んでいたゲームボードの造形や動物を模した皿など、小さい中にも独特な表現と世界観が詰まっている。大量の棺や石棺など、ここでしか見られない展示物と、物量を詰め込んだ展示方法が非常に貴重であった。

4000年前も現在も、人間が造る巨大な建造物は、権力・力の象徴の一つとして存在しており、今も世界中で世界一を目指して国で高さを競い合い、4000年前も力の象徴としてより巨大な神殿や墓を作った。自身がモチーフとして来たダムや巨大土木建築は、インフラの一部として権力や力といったことから逸脱しつつ圧倒的大きさで存在しているところが非常に面白い部分で魅力があるということがこの研究で明確になった。

大学授業における
研究成果の還元

この研究で得られた資料や実際に撮影してきた写真や映像を元にした講義。そして、研究から着想を得て制作した作品による展覧会での還元。























